

狂言・乱能公演 「伝統と新奇」

の開催について



公立大学法人

静岡文化芸術大学

令和3年12月2日

静岡文化芸術大学 事務局

【電話】053-457-6105（地域連携室）

本学では2001年以来、学生が企画・運営の中心となって、毎年10月に「薪能（たきぎのう）」公演を実施し、これまで19回に渡り、多くの市民の皆様にご覧いただき、お楽しみいただきました。しかしながら記念すべき第20回目の開催を目前に、新型コロナウイルス感染症の影響で昨年と今年は一般の来場者を迎える公演は中止・延期をせざるを得ない状況となりました。

そこで、「薪能（たきぎのう）」公演の代替企画として、学内者限定の公演ではありますが、いつもとは趣向を変えた「狂言」と「乱能¹」の公演を実施する運びとなりました。一般の方には観覧いただけませんが、この公演の様子は映像にまとめ、後日一般公開する予定です。出演者はプロの狂言師と能楽師、そしてSPAC（公益財団法人静岡県舞台芸術センター）俳優の皆様です。つきましては、学生たちの新しい取り組みをぜひ取材くださいますよう、よろしくお願いいたします。

狂言・乱能公演 「伝統と新奇」（観覧は学内関係者のみ・後日オンデマンド配信）

<開催概要>

【日時】2021年12月6日（月曜日）午後6時10分から午後8時30分（開場：午後5時45分から）

【場所】静岡文化芸術大学 講堂

【対象】本学の学生・教職員のみ

【参加費】無料

【定員】150名（報道機関様にはご観覧いただけます）



←大学公式HP

イベント紹介ページ

【演目】**第一部** 狂言「因幡堂」

出演 井上松次郎（狂言方和泉流）、鹿島俊裕（狂言方和泉流、佐藤融（狂言方和泉流）

第二部 乱能狂言「梟山伏」

出演 梅若猶彦（観世流シテ方）、館野百代（SPAC 俳優）、梅若長左衛門（観世流シテ方）

井上松次郎（狂言方和泉流）

第三部 アフタートーク

出演 梅若猶彦、井上松次郎、泉雅一郎（観世流シテ方）、館野百代

連動企画 展覧会「あなたもお能を見たくなる 能楽ことはじめ」（一般来場可能）

【会期】2021年11月29日（月曜日）から12月8日（水曜日） 注：土・日は休み

【開場時間】午後12時10分から午後6時30分

【場所】総合演習室

【企画】静岡文化芸術大学 薪能プロジェクトチーム（指導：芸術文化学科 教授 梅若 猶彦）

【問合せ】静岡文化芸術大学 地域連携室

Tel. 053-457-6105（平日午前9時から午後6時）

E-mail: chiiki@suac.ac.jp

静岡文化芸術大学

¹ 「乱能」＝能楽師が自分の専門以外の役を演じる能公演。

[illegible]

狂言

乱能

[illegible]

梟山伏

*SPACE 演出

主催・運営：静岡文化芸術大学 薪能学生プロジェクトチーム

ご挨拶

乱能について

乱能とは能楽師が自分の専門以外の役を演じる能公演のことをいいます。乱能の歴史上の成立に關しては諸説ありますが、少なくとも専門性がある程度制度化されてからのことでそれ以前では既成の制度を無視することがテーマである乱能の意義もなかったでしょう。ちなみに能（猿楽）の制度化は秀吉から始まり、江戸幕府の式楽で完結しています。

現在でも、シテ方が狂言方の専門である狂言公演に出演することはありません。それどころかシテ方の異流共演も許されないのが現状で、これは狂言にも当てはまります。乱能とは能楽師が厳格な制度から解放され、安心して下手な演技や間

違ってもお咎めもない、いわばカオス公演といえるでしょう。「梟山伏」にはゲストとしてSPAC俳優の館野百代さんにも参加していただきます。古典が現代劇の俳優によって演じられることにより、さらに乱となることを期待しています。

乱能公演が実現したのも、このご時世のなか、薪能プロジェクトチームの学生が絶え間ない努力をしてくれたおかげです。お疲れ様でした。能楽の普及に貢献してくれてありがとうございます。



梅若猶彦（うめわか なおひこ）

能楽観世流シテ方。昭和33年（1958）年大阪府生まれ。56年上智大学外国語学部卒業。平成7年ロンドン大学ローヤルホロウェイ校博士課程修了、PhD。伝統を追求する一方で、新作能や現代劇にも取り組む。著書に『能楽への招待（岩波新書）』など。ロンドン大学客員教授を経て、静岡文化芸術大学教授、慶應義塾大学国際センター非常勤講師（2021年9月現在）。

Q「因幡堂」「梟山伏」それぞれの曲としての見どころを教えてください。

Aまず『狂言』とは、日本最古の古典喜劇であり人間ドラマと云えます。身近に巻き起こる「無さそうで在りそうな」また「在りそうで無さそうな」騒動を、やや誇張表現して面白可笑しく描いています。

日々の暮らしに於いて何かと抑圧や制約のあった成立当時（室町期）、身分格差や夢物語などから派生する風刺や教訓が盛り込まれた作品が多く見られます。笑いのエッセンスを生むには、「立場・優劣の逆転」「無知・無教養」「一人よがり・エゴイズム」などがその要素となり得ます。

これらを踏まえて、『因幡堂』は『夫婦』に巻き起こる騒動です。妻に不満を持つ男が三行半（みくだりはん）（＝離縁状）を突き付けて、自らに相応な新妻を求めて因幡堂の薬師如來に祈願するという物語、つまり「一人よがり」をテーマとした作品です。男の淡い期待・欲望が垣間見え、今も昔も不変で身勝手な日常に一石を投じ、身につまされぬ様にとの教訓も秘めています。因幡薬師（平等寺）は京都下京にあり、基は病氣の方による心の拠り所（特に癌封じ）としての信仰を集めています。狂言にはこの因幡薬師が登場する演目がいくつか存在し、それほどこに種々の祈念を仰がれてきた有益な寺であることが伺えます。一方『梟山伏』は立場の逆転が眼目となる作品です。こちらは物怪（もののけ）に取り憑かれた病氣の弟に対して賢

命に治癒を試みる『山伏』が苦しみます。

山伏とは修行僧のこと。僧侶は身分も高く保証され、狂言に於いては特殊な能力（神通力）を持ち合わせるが為に傲慢で大柄な態度という前提で、魎（やがて）翻弄し破綻を招くという設定が庶民には痛快を誘います。本曲は能「葬上」を軸としたパロディともなっていて、本来あるべき姿（この場合は病の完治）とは状況が逆行する様が笑いには不可欠であり、是非両曲を見比べていただくも趣があらうかと思えます。井上松次郎

Q 能楽には、舞台様式が定まっていたり、演じる役が固定されていたりというような西洋演劇にはない要素がありますが、このような独特な要素を持つ能楽の演劇形態の魅力とはどのようなものか教えてください。

A 西洋の演劇は、表現を誇張したり、大がかりな舞台装置を使ったりします。ギリシヤでは、大勢の登場人物で登場させて、表現することがあります。プラスしていく表現方法です。能は能舞台という限られた空間で、演じられます。舞台装置も作り物という簡素化された物を使います。様式化された型で表現します。登場人物も最小限で演じます。出来る限り簡素化されたマイナスの表現演出です。

こうすることによって、表面に見えるものだけではなく、内面に深く存在するものを表現することが出来ます。

梅若長左衛門

Q 今年度は狂言の公演ですが、今回で20回目。地域連携演習の公演となります。これまでのような理念のもと「静岡文化芸術大学新能」の活動を続けてこられましたか。

A アートマネージメントの一環として2001年10月に第一回静岡文化芸術大学新能が始まりました。開催の直前の一週間、私はニューヨークにいました。未だ同時多発テロから一ヶ月経っていません。DIA財団主催の「Noh such Thing as Time」能「屋島」公演は一時は中止とも思われたのですが、当時のジュリアーニ市長が能公演に積極的であったことで実現しました。一ヶ月経っても、DIAの屋上からは遠く貿易センター付近の煙が見えたのです。

当時の新能プロジェクトチームは僅か三名で構成されており全員女性でした。渡米していた私は直接運営の指導をする事ができず、事務局の方々の協力のもと、学生が独自に頑張ってくれていました。ケネディ空港にあった公衆電話で学生と話し合ったのを覚えていました。

新能の運営と言っても活動は多岐に及びます。ざっとですが、チラシポスターデザインと全ての広報、ダイレクトメールの発送、チケット販売と発送、電話応対、出演者への連絡、仮設能舞台の設置驚くべきことに3名の女子学生がまる一日かけて手作業で行っていたのです。業者（照明音響等）相見積もりの確認、業者との会議、発注、それにある程度新能の予算の管理をしていました（通常、大学では有り得ないことです）。

あれから20年という歳月が経ちました。その間、100名近い学生が新能を通して

能の普及に貢献してくれました。毎年10月開催でしたので夏休みは返上してのことです。

梅若猶彦

Q&A

井上松次郎さん、梅若長左衛門さん、梅若猶彦先生のお三方に、新能プロジェクトチームからの質問にお答えいただきました！

因幡堂

酒呑の妻を持つ男は、妻の留守中に離縁状を送り付け、妻乞いをするために因幡堂の薬師（仏）の元へ行く。因幡堂の薬師の前で夜を通して願掛けをしている男は、夢の中で薬師からのお告げを聞き、早速新妻と出会えるという場所へ向かった。そこにいた女は被衣を被りなかなか顔を見せてくれない。果たして男は無事に新妻を迎えることができるのだろうか…。

梶山伏

弟が山から帰って来ると、様子がおかしくなっていた。これは物の怪に取り憑かれたせいだと考えた兄は山伏の元へ治療を頼みに行く。山伏が治療を始めると突然奇声を発し出す弟。弟は無事に元に戻ることはできるのだろうか…。

梅若長左衛門（うめわかちやうざえもん）

観世流シテ方。（社）能楽協会会員 重要無形文化財（総合指定）。日本芸術院会員二世梅若実の孫。財団法人梅若会理事。三歳より父日本芸術院会員故梅若恭行及び、伯父日本芸術院会員五世故梅若六郎より指導を受け現在にいたる。現四世梅若実とは従兄弟。2010年12月梅若六郎家筆頭分家名 梅若長左衛門を襲名。成城大学にて民俗学を専攻（日本における仮面成立の研究に取り組む）



鹿島俊裕（かしまとしひろ）

能楽師（狂言方と泉流）昭和50年生。佐藤友彦に師事。名古屋大学入学と同時に学生サークル「名大観世会」に入部、狂言と出会う。大学卒業と同時に狂言の道志し、尾張徳川藩に由来する狂言方と泉流山脇派（狂言共同社）に正式入門、本格的修業に入る。流儀秘曲「三番叟」「釣狐」を披露。近年専業の道志し、舞台活動を通じて経験と実績を重ねつつある。

現職／（公社）能楽協会 名古屋支部常議員

井上松次郎（いのうえまつじろう）

能楽師（狂言方と泉流）昭和46年生。四世故井上菊次郎（祐一）の長男。重要無形文化財総合指定保持者（日本能楽会会員）。尾張徳川藩に由来する狂言方と泉流山脇派井上菊次郎家に生まれ、その五代目として修業・活動。流儀秘曲「三番叟」「釣狐」「金岡」「花子」など披露。東京藝術大学音楽学部卒業で能楽を専攻、在学中は狂言界の重鎮野村萬・野村万作両師の指導も受けた。演者としての公演活動のほか、東海地方を中心とした小中学校などの体験授業講師も担いながら、長男着大（そうだい）・長女真珠乃（まりの）をはじめ後進の育成も務める。



館野百代（たての もも子）

東京都出身。1991年水戸芸術館ACM専属俳優、SCOTを経て、98年よりSPACに所属。老若男女問わず様々な役を演じ分け、長きに渡り第一線で活躍し、国内外で様々な演出家と作品を創作している。SPACの主な出演作は、『イワノフ』（演出：鈴木忠志）、『アンティゴネ』（演出：宮城聰）、『変身』（演出：小野寺修二）『Romeo&Julius』（演出：振付：金森穂）等。



佐藤融（さとう とおる）

能楽師（狂言方と泉流）昭和44年生。佐藤友彦の長男。重要無形文化財総合指定保持者（日本能楽会会員）。祖父の代より狂言に接し幼少より舞台を勤め、井上松次郎（靖浩）とともに「狂言のり座」「ナディア狂言」を主宰。流儀秘曲「三番叟」「釣狐」「金岡」「花子」などを披露。



泉雅一郎（いづみ まさいちろう）

観世流シテ方。1954年9月生まれ。大槻秀夫・文蔵両師及び父、泰孝・叔父、嘉夫に師事。観世会、鏡仙会会員。2001年重要無形文化財総合指定保持者認定。



十二月六日(月)
狂言公演

薪能プロジェクト2021 特別企画

狂言公演 「伝統と新奇」

とき 令和3年十二月六日(月) 十八時十分開演
ところ 静岡文化芸術大学 講堂

狂言 因幡堂

男	井上松次郎	後見	佐藤 融
女	鹿島 俊裕		

狂言 梟山伏

山伏	梅若 猶彦		
弟	梅若 長左衛門	後見	井上松次郎
兄	館野 百代		

(休憩十分)

アフタートーク

梅若 猶彦
井上松次郎
泉 雅一郎
館野 百代

照明・音響 - Pitch-code
撮影 - K&K Company
主催・運営 - 静岡文化芸術大学 薪能学生プロジェクトチーム